

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

授業実践・カリキュラム開発  
コース/前田 洋一

## ■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

## Ⅰ. 学長の定める重点目標

## Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

## 1. 目標・計画

教職大学院として、現職教員学生と学卒学生が本学卒業後、教育現場でスクールリーダーとして指導的役割が果たせる資質と能力を身につけることができるよう、理論と実践の両面にわたる授業を行ってきた。学生による評価も高かった。本年度は、ワークショップやシミュレーション、事例分析等を取り入れることで、実務家教員として、これまでの教職経験を生かした教材提示、課題解決法など、実践との結びつきを重視した教材を更に計画準備し、継続的に授業改善に取り組む。評価については、スクールリーダーとしての要件を明確にした上で、その資質や能力を身につけることができたかを、学生の行った分析、計画、実践、開発のそれぞれのステップで評価するとともに、総括的な情報発信能力について評価する。特に本年度は、平成22年度の結果を踏まえ、カリキュラム改善に重点を置く。また、本年度は、小学校教育先週学校教育実践コースのコース担当、授業担当者として6年カリキュラムを実施しながら、逐次改善を加える。

## 2. 点検・評価

前期の教職大学院及び学部による授業評価は、高かった。特に、学部の教育過程論、教育評価論の教科においては満足度が「4. 4」、「4. 5」であった。教職大学院の授業においても満足できる評価であった。後期授業、「教科・研究主任の力量形成(P1現職)」は全体の評価平均値は、4.6であり本授業の目的は達成されたといえる。また、「授業実践フィールドワーク」は全国的な研究会における優れた実践研究を参観し、その検討会を行う意義は、受講生のアンケート結果から十分に達成されていると判断できる。特に、「この授業は、自分自身にとって満足できるものであった」は、4.9と高く受講生の満足度が伺える。「教材教具の開発演習」は、全体平均3.3と高くない。この授業はオムニバス形式で複数の教員が担当している。この結果を、自分の担当した内容領域に付いてみると好評であったことが分かる。しかし、全体として表れた評価が低い以上、今後各教員と連携し内容の充実を図っていきたい。

## Ⅱ. 分野別

## Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

## 1. 目標・計画

- ①教育庁義務教育課で人事業務を担当した経験を生かし、教員採用試験受験者に対して具体的な対策法を提示しながら就職支援をしていく。
- ②クラス学生、ゼミ生を問わず、学生の教育関係はもちろんのこと、それ以外の質問や相談にいつでも気軽に応じることができるように努める。
- ③ゴルフ同好会顧問として、健全な同好会運営を推進する。

## 2. 点検・評価

平成24年度 教員採用試験に向けて、採用試験対策として面接指導、論文指導を行った。学生からは、これまでと違った視点から教員採用試験に取り組むことができたことと好評を得た。  
担当の教職大学院生に限らず、学部生の教職に関する相談に丁寧に対応した。特に、長期履修生にたの教育関係はもろんのこと、それ以外の質問や相談にいつでも気軽に応じることができた。  
「ゴルフ同好会」担当として健全な同好会運営に尽力することができた。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

- ①「つなぐこと」「壁をとること」をキーワードに、カリキュラム開発の視点から、学校組織をつなぐ校種間連携・学校づくりと授業における学習者同士、学習者と指導者をつなぐコミュニケーション、特にダイアログ(対話)の効果について研究を進める。
- ②実務家教員として、学校現場のニーズに対応した研究に取り組んでいく。
- ③科学研究費補助金に積極的に申請していく。

## 2. 点検・評価

著書は、「幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発 ～子どもの育ちと学びをつなぐために～」(共著) Mj-books、「教育フォーラム48 「国際教育のために」として」(共著) 金子書房の2冊を執筆できた。  
研究論文としては、「幼小接続期におけるカリキュラム開発」、奈良文化女子大学研究紀要 第42号(共著)、「大学・教育委員会・学校と連携した教育改善に関する実践的研究(Ⅰ)―大学と鈴鹿市教育委員会との連携事業に関する学校支援の目的と経過―」(共著) 鳴門教育大学 学校教育研究紀要 第26号、「大学・教育委員会・学校と連携した教育改善に関する実践的研究(Ⅱ)―鈴鹿市中学校における生徒質問紙調査結果より―」(共著) 鳴門教育大学 学校教育研究紀要 第26号、「スクー ルリーダーのシステム思考育成に関する実証 的研究 ―教職大学院における実務家教員の役割と機能―」(単著) 鳴門教育大学研究紀要 第27巻、「System thinking for qualifications and abilities as a school leader」(単著) Naruto University of Education PROCEEDINGS OF THE FOURTH JAPAN-CHINA TEACHER EDUCATION CONFERENCE の5稿をまとめることができた。  
また、本年度は、連合大学院の教員審査において、D合となることができた。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

- ①教職大学院コラボレーションオフィスコーディネーター及び第2期生のグループ担当教員(クラス担当教員)の一人として、本学教職大学院の運営面や教育活動を推進する。
- ②小学校教育先週学校教育実践コースのコース担当として、今後の6年カリキュラムのあり方について検討を加える。
- ③学校現場での経験や教育委員会勤務(教員研修、教職員人事)の経験を生かした実務的な協力を行う。
- ④教職大学院の定員確保のため、関係機関や教育委員会、学校に積極的に広報活動を行う。

## 2. 点検・評価

教職大学院コラボレーションオフィスコーディネーター及び第2期生のグループ担当教員(クラス担当教員)の一人として、本学教職大学院の運営や教育活動に貢献することができた。  
教職大学院のコース再編、カリキュラム改善に向けて、検討をおこなった。  
学校、教育委員会、教育研究団体等からの招待講演・講話の際において、大学院定員充足のために、本学、教職大学院について積極的に広報活動を行った。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

①教育研究の成果を積極的に教育現場に広め貢献していく。特に、現職教員等に関わる研修への協力要請があれば、積極的に対応していく。

②附属学校の教育研究会等について、積極的に協力する。

### 2. 点検・評価

「岡山県総合教育センター主催 校長全員研修」、「特例社団法人 日本精神科看護技術協会主催 研修会」、「徳島市沖州小学校校内研修会」、「(財)関西生産性本部主催 学校「経営品質」向上研究会」、「岡山市国公立幼稚園教育研究会研修会」、「鈴鹿市天栄中学 校校内研修会並びに校研究発表会」、「高知市教育委員会主催 不登校・いじめ等対策小中連携事業に関わる重点中学校区合同研修会」、「奈良市立平城西小学校校内研修会」、「徳島市国府中学校校内研修会」、「三田市幼稚園会研修会」、「福井市光陽中学校校内研修会」等、都道府県の研修センターからの研修講座、市教育委員会、小中学校からの依頼、アドバイザー等派遣事業による依頼など積極的に対応し、これまでの研究成果を広く公開してきた。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

鈴鹿市教育委員会と本学との連携協定に基づき行われている公立学校を対象とした教育改善に関する実践とそれにかかわる研究に関して、拠点校担当者として積極的に貢献したことにより、大学と教育委員会の連携強化に成果を上げることができた。